

大丈夫、が溢れる空間



香川県 株式会社朝日設計

秋山 瑞葉

第5回日本語大賞 一般の部 優秀賞 受賞作品

大丈夫、が溢れる空間

香川県 株式会社朝日設計

秋山 瑞葉（あきやま・みずは）

大丈夫。

生きていく上で、私が最も心の拠り所にしてている言葉である。一日で、一生で、いったい何度使う言葉だろう。誰かにこの言葉を掛けるのと同じ数だけ、自分自身も誰かに掛けられている言葉だと思う。

心配、了解、励まし、期待、肯定、不安の軽減と、様々な意味を持つ多能な言葉だが、その懐の深さに、私は日本人のおおらかさや慈悲深さを感じて止まない。

中学一年生の時、毎年催されている合唱コンクールでピアノ伴奏を担当した。晩夏に、クラス会議で伴奏者の立候補を募られたが、手を挙げる者は居なかった。技量の個人差はあれど練習に膨大な時間を奪われ、一音でも失敗を犯せば非難を浴びる。そんなピアノ伴奏をやりたがる者は皆無だった。そこで白羽の矢が立ったのは私だった。ピアノの経験は無い、と弱々しく主張したが、私が吹奏楽部に所属しているから、という屁理屈をクラスのリーダー格の男子にこじつけられた。

当時私はうまく級友の輪に溶け込むことが出来ず、クラスの中で浮いた存在だった。人間関係にいざこざはつきもので、皆それを乗り越えて仲を深めていくものだが、臆病な私はそういった摩擦から逃げていた。口数が少なく、いつも陰鬱だった私は、いじめには満たぬが軽い嫌がらせの様なものも受けていた。だから、私の名を挙げたクラスメートの中には、仲間はずれの失態でも見て暇を潰そうという、悪意がある者も居たのだろう。

一部始終を観察していた担任の中田先生は、何も言わず私に楽譜を渡した。その日から、合唱コンクールが開催される十月まで猛特訓が始まった。

朝はまだ夜も明けきらぬ内に家を出て、帰りとはとつぷりと日が暮れてから校舎を出る。教室で机に向うより、音楽室でピアノと戦っている時間の方が長く感じられた。一カ月も経つと音楽室の鍵を預けられるようになった。

頑張れ、と励ましてくれる友達は何も居なかった。それどころかクラスメートは、自分達で指名しておいて、私の不慣れた指の動きを野次る者ばかりだった。

けれど、決して一人ぼっちでは無かった。早朝から夜遅くまで、私のピアノ練習に付き添ってくださった方が居た。担任でもあり、音楽の先生でもある中田先生だった。

中田先生の指導は厳格で、一切の手加減も許されなかった。いつも眉間に皺を寄せて、私の手を覗むように見張った。初めて触れた鍵盤楽器は、私の掌にうまく馴染んでくれなかった。短い指がもつれる。外は暗い。応援してくれる者も居ない。出来ない、と中田先生の前で何度嗚咽を漏らしただろう。

大丈夫。

ぐずぐずと泣いて楽譜を投げ捨てる私に、中田先生は何度もそう叫んで叱咤した。私の頬を掌で叩く代わりに、強い口調で私の心臓をノックした。中田先生は、音を外すことよりも途中で詰まってしまうことよりも、出来ない、と白旗をあげることを嫌った。

合唱コンクールを前日に控えた夜は、特に遅くまで音楽室の灯りが消えなかった。何十回何百回と繰り返し演奏しても、中田先生は首を縦に振ってくださらない。結局最後の日

まで、彼女は褒めてくださることも笑ってくださることも無かった。

迎えた当日、ステージに上がる時間はすぐに訪れた。クラスの皆が整列している間、譜面台に置いた楽譜をまじまじと眺めた。厚紙で作った水色の楽譜はぼろぼろだった。擦り切れた所を何度もテープを張りなおし補強したので、不恰好な厚みがあった。失敗して転んで、立ち上がってまた挫折して。まるで私自身のような楽譜だな、と緊張が渦巻く脳の片隅で考える。指先だけではなく、腕全体が震えていた。ごくりと唾を飲み込んで、楽譜を開いた。

視界に飛び込んできたのは、音符が始まる前のスペースに、ボールペンで書かれた「大丈夫」の文字だった。誰が書いたものかは一目瞭然だった。角張って直線的な字体は、中田先生の人柄そのものを表していた。

指揮者がタクトを振り上げる頃にはもう、震えは止まっていた。あとは指に任せるだけだった。脳がとやかく指示する必要もなく、私の指は鍵盤上で軽やかに踊った。心地よささえ感じられる自信は、中田先生の厳しい指導の中、逃げずにピアノと対峙して得られたものだった。

拍手に包まれながら舞台を降りると、中田先生が待っていてくださった。目立ったミスもなく弾き終えられたことを報告しようと駆け寄ると、強い力で抱き締められた。

「もう、大丈夫だ」

そして、力強い言葉で彼女はそう呟いた。中田先生が教えてくださったのは、ピアノの技能だけではないことに、その時やっと気付いた。

感謝を伝えようと向き合ったその顔に、笑顔はなかった。やっぱり中田先生は、最後まで笑ってくださらなかった。皺だらけの顔をもっと皺くちやにして、中田先生は泣いていた。

大丈夫。

大人になった今の方が、この言葉の効力を痛感することが多い。自分を安心させたいときや鼓舞させたいとき私は、胸の引き出しに大切に仕舞っているこの言葉を持ち出す。脳裏に掲げることもあれば、小さく声に出して呟くこともある。自信を持って自分に、大丈夫だと伝えることは、努力している今までの自分を認めてあげることだ。大丈夫、の言葉はいったって、跳躍するためのエネルギーになってくれる。

大丈夫、という中田先生の力強い叱咤が私を救ってくれたように。大丈夫、という密やかな誓いが、私が私を成長させてくれるように。

私はこれからも周囲の人達に、大丈夫、と声を掛けられる人間でありたいと思う。その言葉が溢れる空間は、とても温かく満ち足りた世界だと思うから。